

紹介

稲田浩二氏著「昔話は生きています」

守 屋 俊 彦

一

稲田さんは、私の長年の友人である。畏友といってよい。ここ十年來村々を歩いて、昔話を熱心に採取された。それらはすでに幾つかの昔話集（「なんと昔があつたげな―岡山県昔話資料集」など）となつてでているのだが、それらを土台にして、稲田さんの昔話にたいする方法や立場を述べられたのが本書である。新書版ではあるが、たいへん充実した内容となつてゐる。何よりも稲田さんの長年のご苦労にたいして心から敬意を表したい。

本書を読んでまず感じたことは、その文章である。名文というのではない。もとより美文などではない。むしろ、平凡な文章である。しかし、そのどこかポキポキとしたような文章が、かえつて本書の内容によく調和してゐる。昔話のリズムである。稲田さんはま

るで昔話の語り爺さのように、私たちに語りかけていられるのである。私たちはこのリズムに乗つて、自然に昔話の世界に入ることができるのである。美事である。

二

さて、稲田さんは、最初の「野の花と造花」という章で、自分の方法をはっきりとうちだしていられる。日本の代表的な昔話である「さるかに合戦」を取りあげ、語られた昔話と書かれた昔話とを対比していられる。一番の相違は、かにが殺されるのと、子がにが仇討ちするところである。例えば、伯耆大山の旗で語られている、「かにの仇討ち」では、かにには「甲がつおれて」死んでゐるし、「ぐやぐやぐや生まれ」た子には、白などの手助けによつて仇討ちし、間違ひなく「猿は死んでしまつ」てゐる。ところ

が、現在市販されている絵本の中には、かにはたんじけがをするにとどまり、猿は自らのあやまちを悟ってゆるされることになっている。ここには現在の人間主義的なモラルによる着色があるのだが、稲田さんは、これは「造花」であって、本当の昔話ではないとしていられる。昔話は、「名もない人々の、つましい創造としていままで生きてきた」ものなのであり、こうした人々によってげんに口づたえられている昔話こそ本当のものである。そして、その名もない人々の住んでいるところとして農村社会をみていられる。だから、本当の昔話は、「野の花」ということになるのである。つまり、ここでいっていられるのは、昔話は語られる場において扱えられなければならないということである。

そこで稲田さんは、次の「野外からの報告―今日の昔話」では、この「野の花」が咲き乱れている農村社会に、私たちを連れてゆかれるのである。私たちは、まず岡山県阿哲郡神郷町三室と真庭郡八束村・川上村とを訪れることになる。そこはそれぞれ四十戸と千六百戸ほどあるが、それを稲田さんは「一軒一軒しらみつぶしに」訪れて、十八人と六十七人の語り手、一〇二話と三四五話の昔話をみつけられるのである。まさに汗の結晶である。このあたりを読んでいると、私たちは稲田さんと一緒に山深い村々を歩き、がばたで昔話を聞いているような気分になってくる。巧みな導入というべきで

あろう。

ここで問題にされているのが、その語り手である。語り爺さ(婆さ)むかし爺さ(婆さ)むかしがたり、話し家、などと呼ばれている。男も女もいるが、語り婆さの方が多い。よい語り手はおばあさんということになる。そして、長岡市の下条登美さんが二五一話、岡山県阿哲郡西町の賀島飛佐さんが三〇〇話の昔話を語ったなどということがでてくる。一人でこんなに多くさんの昔話を管理していたとは驚くのはかはない。現代の語り部である。その昔話の聞き手はこれらの人々の孫たちである。孫たちはがばたで昔話をくり返し聞くのである。しかし、孫たちが昔話を聞くのは、たんに家の中の祖母たちばかりではない。家の外にて、旅芸人や遊行者などからも聞くのである。その場所は寺の本堂や氏神の社である。ここでまず昔話の伝承者や語られる場所を問題にされたのは、稲田さんの方法からすれば当然な順序といえよう。

これにつづいて、その語られる昔話の形式を述べていられる。昔話には、発端の語り出し方、一文ごとの結び方、結末のしまい方などにきまり文句があるとのことである。とくに結末のことばは多彩である。ここには多くさんの例があげてあるが、「いちごさかえた」「むかしこっぶり」などというのを読んでいると、素朴な村人の顔が浮かんでくるようでまことに楽しい。

こうして昔話そのものに入ってゆく。次の「昔話の展望」では、

昔話の三つの大きな類型である、「本格昔話」「笑話」「動物昔話」を取りあげていられる。しかし、それをたんに類型的に並べるのではなく、「祖先の暮らしの中でどんな役目を果したのだから」というところに重点を置いていられる。例えば、鳥取県の川上貞蔵さんの家では、菖蒲の節句の夜には、「食わず女房」を語るしきたりになっていた。これは飯粒一つ食べない嫁の話なのだが、その終りは、この化物の嫁がしようぶの薬で目をつけて盲になり、それで夫はその難をまぬがれることになっている。そこで川上さんはこともたちに、菖蒲の夜には屋根をしようぶでふくのだ、と諭すのである。ここでは昔話はしきたりの守り神であった。また、山口県厚狭郡山陽町には、「厚狭の寝太郎さま」の話がある。彼は「寝ては食い食っては寝る」寝太郎であったが、ある日突然に厚狭川の流れを「荒野に通そうと決意」し、遂に干町田を作り、稲荷大明神となる。その彼は細田家の祖先ということになっている。一族の始祖のめでたいものがあり、そこに農民の熱い願いがこめられてもいる。こうして昔話は村共同体の伝承となってくる。稲田さんは「本格昔話」をこのようなものとしてとらえられている。なお、この

ような昔話が季節の折り目や「昼むかしはねずみが笑う」（青森）というように夜に語られるというのは興味深い。

次に「笑話」であるが、その代表的なものは、うそ話、ほら話である。備後吉備津神社では、節分祭の夜に籠り堂に人々が来まり、夜を通して放談し、笑いさんざめく。終りは必ず色話となる。それは笑いによって田の神を慰め、新しい年の豊作を祈るものであった。笑わせるのが目的なのだから、笑話は新鮮なものほどよかった。なお、この笑話には、ほか俚話や愚か村の話などがある。笑い草にしたり、たくんではほうになり、雑題を撃退するのである。ところで、昔話の聞き手であることもたちは動物が遊び仲間でもあった。そこで彼等の果てしない詮索好きから、「猿のお尻はなぜ赤い」というような疑問を抱き、それを昔話の中で解き明かしてゆく。「動物昔話」のなぜ話である。

さて、稲田さんは、このような方法で昔話の場や類型を述べながら、自らの立場を除々に鮮明にしてこられるのである。その立場は、一口でいえば、昔話は民衆のものだということである。それを稲田さんは、「民衆の大樹」というような表現をしていられる。そこで、そのところを今少し稲田さんに聞いてみよう。ここに有名な「桃太郎」の話がある。この話で人々をわかすのは、いうまでもなく、鬼征伐のところである。ところが、備中・備後でげんに語ら

れている話では、桃太郎のふだんの生活の方に力がいれられている。ここでは、桃太郎は何も仕事をしない「寝太郎」であり、「ものくさ太郎」なのである。しかし、一旦山に入ると、こんどは大木を根こそぎ引き抜いたりして「力太郎」になる。民衆の切実な願いをのみこんだ英雄になっている。民衆はまた、「お銀小銀」や「知恵あり殿」のような、人をだまし陥れ殺す昔話を好んで語るのである。

このような悪の芸術を語ったのは、それが暗い時世に「民衆の心を未来に向けて解放して」くれたからである。つまり、昔話は民衆の中に生まれ、語られ、その心を明るく解き放つものなのである。稲田さんが一番言いたかったのは、或はこの「民衆のもの―昔話」という終りの章にあったのかもわからない。だからこそ、入門書である本書の題をたんに「昔話」としないで、わざわざ「昔話は生きている」というふうになされたのであろう。

四

本書の内容はこのようなものであるが、何といっても、その方法に特色がある。昔話を、それが語られている場においてとらえ、そこでの役目を重視してゆく。それはマリノウスキーの神話学における機能説に近い。しかも、それを理論としてではなく、稲田さんが実際に足で歩いて採取された昔話によって固めていられるだけに説

得力がある。示唆に富む見解もあちこちに示され、叙述も平明である。すぐれた入門書といえる。是非一読をおすすめしたい。

さて、本書はこのような方法で一貫しているのだが、それが同時にやや弱味にもなっているように思われる。昔話の変遷過程を追ってみる（柳田國男氏「昔話覚書」など）とか、昔話そのものの構造やプロットをみる（関敬吉博士「民話」など）とかいう点が欠けている。そこには勿論、稲田さんの独自の方法があるのだが、昔話には、こうした面からの分析も必要なのだから、それらを今少し取り入れられたなら、稲田さん自身の方法もよりしっかりしたものになってくるのではないだろうか。それから、ここでは当然なこととして、主として今の昔話が使われているが、昔話には、今昔物語をはじめとする説話文学の一群がある。それらは文学としてもすぐれているのだから、それらをもっと使われた方がよかったのではないだろうか。すれば、内容は一層豊かなものになったろう。これを別ないい方をしてみれば、稲田さんがここで示された方法が、これらの説話文学にあてはめてみた場合、どのようなことになるのか、ということをさらに述べていただければと思うのである。それから、その立場である。稲田さんの、昔話や民衆への愛情は痛い程わかるのだが、やや付きすぎている感じがする。時には、その中に自ら酔っ払いられるようなふしがみえないでもない。そのために論が幾らか

甘くなっているところがある。とくに終りの章では、その方法と立場とがやや性急に結びつけられているような気がする。それは稲川さんの「今日の課題が優先する」という意図によるのだろうか、こゝは、矢張り、一度つき放して冷静に眺めてみる必要があるのではないだろうか。私なりの希望を一、二述べてみた次第である。

なお、希望ついでに、本書の内容とは少し離れるが、稲田さんに今一つお願いがある。それは、昔話をさらに採集していただきたいということである。昔話は今や絶滅の危機に瀕している。ラジオやテレビの普及、とりわけ昔話を育ててきた農村社会そのものが急速に変質したからである。採集は急を要する。稲田さんがそれらを集めて、関博士の「日本昔話集成」以後のものをだされる日を待望したい。それは同時に読者へのお願いでもある。一人でも多くの方が本書を読まれて、昔話に関心を抱き、その保存伝承に力添えされることを切望して止まないものである。(昭和四十五年九月刊 三省

堂 三省堂新書)